

随 想

## 時間と仕事

佐々木 教祐

パソコン専門誌に90年代の予想が載っていた。現在最も速いパソコンは1秒間に1000万回の命令をこなすが、これが3年毎に倍々と速くなっていくという。私の研究はコンピュータを使って酵素やホルモンなどタンパク質の立体的な分子のかたちを決めていく『X線結晶構造解析学』と呼ばれるもので、コンピュータは遠ければ速いほど研究は進むことになるわけである。10年ほど前、糖尿病の薬として知られているインスリンの構造を共に研究している縁で中国の北京生物物理学研究所のリャン教授に招待されコンピュータの指導に北京に行ったことがある。そのとき一週間ほど敦煌へ連れて行ってもらった。北京から100人乗りの小さな飛行機に乗った。まず蘭州まで3時間であるが、到着近くになって天井に頭をぶっつけるほど飛行機が急降下したのである。まわりの中国人達はすぐおしゃべりを始めた。後から聞くと、砂漠の上ではよくあることだという。蘭州からSLで遠くに雪をいただいた山々を左手に見て、所々に崩れかかった堰堤のような漢代の万里の長城以外何もない砂漠の中を汽車にゆられて24時間、さらにジープで5時間やっとな敦煌の町に着く。道々漢代の狼煙台があり、私のまわりは千年前に一変した。宿泊所にも電灯がなく、日が暮れるとベッドに横になり、朝がくるとNHKのシルクロードで有名になった莫高窟を見せてもらいに行く日々が続いた。壁画や仏像は鳴砂山と呼ばれる山の東側の断崖に四階建ての六畳ひと間のアパートのような穴を約千年にわたって千慮ほどつくった。太陽が東の山から顔を出すと暗い窟の中に光が入り込んで仏様の顔を照らす。これらの仏たちは薄暗い窟のなかでまわりの壁の絵を相手に微笑んでおられた。そのときコンピュータ相手の研究生活とはまったくかけ離れたゆったりとした時間の流れの中で少し自分を取り戻せたのを懐かしく思い出す今日このころである。

(名古屋大学医療技術短期大学部助教授)